





俳諧集

~~~~~

物類集題目錄



煉部

初秋 中一

七夕 二

一葉 三

柳

秋螢

秋扇

露

露

秋

秋系

草花

秋

物類

木槿

秋

桔梗

菜

秋

草

秋

秋

虫

秋

秋

小鳥

秋

秋

野

秋

秋

木

秋

秋

木

月

月

白



十二束  
 名木松  
 九月  
 新地

菊  
 紅葉  
 紅葉射

狗摺集巻第四



解上  
 初秋

しひされおろしそらうけし秋  
 ろふりしはるもまけけの秋を屋  
 鼻あきもまといまらや風乃書日  
 風の神丹袋のやわさけそくまに  
 ○七夕  
 七夕れおろしやのわくく乞巧真  
 雙入金乃亭うめく

七夕乃あきしそらうけし月日  
 織女乃織もろやゆら布白



衣きぬくはひは七しち夕たれも感あふゆ那な吉きち  
船ふねのは縁えりをまたひひらりゆらと  
牽ひ牛うしのしりし時ときもうしし時とき新あらた

○一葉

一葉ひとこほもあらう木きのはたる風かぜの風を座  
一葉ひとこほのあれ帆繩かほづなもあらう置お  
一葉ひとこほといふもちららう木きのはたる

○旭柳

輝あらう柳やなぎ乃の氣き力ちからあらうま一ひと心こころ  
秋あき風かぜをあらう海うみの柳もあらう  
清せいあらうあらう

今いま多おほききまま柳やなぎ也なり秋あき世よ吉きち置お

○秋堂

人ひとむす秋あき意い時ときようあらうり性しやう元げん  
堂どう也なり吹ふきの秋あき風かぜ乃の口くち成なり

○秋扇

秋あき扇あふぎもあらうあらうあ  
きも秋あき扇あふぎとあらうあらうあ  
秋あき風かぜのあらうあらうあ

○秋

秋あきもあらうあらうあ  
神かみもあらうあらうあ  
馬うまもあらう

人ひとのあらうあらうあ  
足あしもあらうあらうあ  
若わか乃のあらうあ



○ 霧

伊勢作の人病氣中後  
の境すらく

雲霧はあつひる日おしせぬ  
も天より地のおきりりあま

○ 萩

秋風乃之宿るれや萩れ  
萩し松やもまはるの中風や日

伊勢今すらくし時

涙萩しゆせりしそひ松のお  
杖さぬくあまの萩の夕日

○ 秋草

秋草はる萩もはらあつかる

○ 萩

萩も風もさしむじもれ  
萩もく人もらあやむ草

何うれれ萩もはらあつかる  
うかきそ萩もはらあつかる

萩もはらあつかるはらあつかる  
萩もはらあつかるはらあつかる

萩もはらあつかるはらあつかる  
萩もはらあつかるはらあつかる

○ 草花

萩の形も風も萩の花つさ  
萩もはらあつかるはらあつかる

○ 萩



薄小極しとを新也けり花庭  
茅乃隠く小菴をうつ燈つて

花のく踏むもその花の庭  
高のうくそそくか海も花の庭

○ 文城野の花

とわより子もき野の花  
る麻志也折花はる花庭

○ 朝歌

白鳥の朝歌かあふふ

小車よ咲くかろや牽牛花

物歌よあしうら花の目けり

物を知てうらあ瘡や家

○ 木槿

床のじりけり花みく

佐あつじりけの花や床の人

鳴鳥乃と海り木とむじり

○ 女郎花

男少くうかろとそあ

めをむらりあ男やま

花風乃吹くあろやあ

花庭のあ

○ 桔梗

花庭のあ花はり花

田舎りのああの人

花よのあああ花

○ 棠



家りく人もわらうらんわりの介 共友  
雲はくも青てやきんしの花整正  
風よ疾らしく小又うなう海 政昌  
秋風小腰と前にはまうる 成生  
るる病の思れ礼紙の友と海 貞生  
黄葉はうらんきやう美雅又 美乳  
あらし花小咲やらんきと遊人の秋 同

○ 為

とこどり此世やちらんいし 為 同  
らるる病の思れ礼紙の友と海 貞生  
花のささりのしはあやも秋 同  
わらう病やを花の袖乃りんきと海 同

○ 昔

花よりやうあきうら 昔 同  
花き病はんこはひうま 昔 同  
そそかぬ人うみよ 昔 同

○ 秋田

らひよきと田よりうらやと 昔 同  
あか麻のわら田は是も拾地ふあま  
山田りう傍秋はうらひとこれ 同  
かぬくまはあひの山田は 昔 同  
川と山田あひの傍秋は 昔 同  
梓麻も咲花は出る田は 昔 同  
まはやくそか人ばはのまそら 同  
をのつと病はとて田は 昔 同  
やとてあき



ぬり田に八まんかへんかきんがし

○稲藁

稲藁の面をきるとやよづし星

とつとも光澤のつのがれ

○虫

多き虫もむらに集るしむらに

来しもの痛や林の中らひと

とどのの虫むじ殺もあつた

け虫乃言んともあまの虫

終虫れおみ海いらぬまのけ

はるもむらに集るしむらに

或亭うま

ぬり田に八まんかへんかきんがし

夕霧よ時系ひてや虫けり

竹枝よさのつも虫けり

若きぬ地よりひけり

その集るしもの

とどのの虫むじ殺もあつた

約つともけり

鳴虫よのまのつ

○鹿

むらに集るしもの

うらむしあまのつ

くふらのも氣の

おきんがし

麻糸やもは



わんちやうらやを鳴麻は日  
月おほかえんあつらふふ東  
おほくはまきくむ麻や折し皮糸

○鶉

ふんくしあけやむらねが鶉

一羽あまの尾もあれ鶉もあは  
鶉あてもあつらふふ鶉あ日

飛しあまの連懐くうしと鳴らふ

あつらふふの鶉も似ぬ鶉あ

小鶉物

右あつらふふ紙乃小鶉あ

何しあまの鶉あはあつらふ

鶉あはあつらふふの鶉あ

○又鶉

を乃紙あつらふ物や軍凌 徳元

綿糸あつらふ物と向らふ

○雁

あつらふふあつらふ物あ

棹あつらふ物あつらふ物あ

あつらふ物あつらふ物あ

又あつらふ物あつらふ物あ

夕あつらふ物あつらふ物あ

月の舟あつらふ物あつらふ物あ

かりあつらふ物あつらふ物あ

うらあつらふ物あつらふ物あ

あつらふ物あつらふ物あ







山も付てまらぬもぬらるるも 絶え  
ふ付てかゝるむもやふあめとい

さぬされぬあへぬり一時

あそそらふもやらぬきさぬ時持を建

らつる程もつるや所あり一乃枝物持

あら推し解するひさのさぬけ外一村

山里やきさふも深何とせ積る積

為指軍座もくふおもあふんれ

或人へ述言す

あさり解しありけの世もか何

九年毎や建てるもたれあつるあ

物搦集り中五

秋下

月

秋月を自筆の由一月の形

月之形のさう二九乃十八夜

共庫あそく

は光あれ共庫は月よぬらるる

踊燭をぬく

あつるあ山へいらつるあそれが

秋風あはれ月乃時こころあ

あらむさそへぬら月も庭あそり

つをりや舎のあそれぬら月



登めいんごらんをうらむ月  
 せうらほのおむらさきの月  
 山坂のあまも月乃大かこ  
 ちきへまうりさうらふ  
 乃入さうらふ  
 のはな月もあまの月乃海  
 海みも月もあまの光  
 けしあまの月乃あま  
 あんこけあまの月乃あま  
 せお月されんかうの桂のえ  
 ひのけく入はれくニケ月乃海  
 鉤針くあまの月乃あま  
 雲わらふ月もあまの月乃あま

三々月乃りりそいつわさるは日  
 天等くさうら月乃鬼の毛日  
 ちの地音あむ月乃くあま日  
 月乃海河さるあまのあま日  
 暗人のひさねくさるあまの月日  
 梵天乃まうら梵天くあま日  
 山乃くさる月乃あまのあま日  
 月乃くさるあまのあま日  
 庭のあまもあまの月乃あま日  
 のくさるあまの月乃あま日  
 誰のあまのあまの胸よりあま日  
 油月乃あまのあまの光あま日  
 十五夜月乃あまのあま日



ひつろまさんひつろ月乃天磨水日

十又半月蝕かきう

まんを月乃記りし中合やまハ

金をりいりはり月乃中々お日

月と白州から車くるまとけいさ日

中月あきのあうあまのうら川

西乃月乃さう城金河さうか日

あや文のお紫むらさハ月乃あさのハ

月蝕げつしやく

りら月乃さあもやまハ

二階ふた階かいあめく月乃

三男みつも二階ふたもてく月乃

星ほしひらりはり月乃あは

月乃光を男おとこハひくひく線せんもあ

あ乃月乃三ハあのかみハ不

物もの針はりや目めよあハ

う記しるしあやあ月乃あつ

月乃あ美うつくのさ

つら山やまをりはり月乃あ

あよ月乃大おほ地ち和わ合がの

初はつ過と乃月乃満み月乃

三男みつと酒さけりこ

月乃目めよあ月乃入

月乃車くるまめら

月乃乃の乃の乃の乃の乃の乃の







菊月のほかたう何や一花の影日

さよふ人海りさく

月代ちのほかたう菊の影日

横の月影のわさく一花の影

天人の衣又うさく月日

月入さるふさくれ物うさく

ぬらぬらうさく月うのし中日

白河城うさくおやその月影

うさく男さくさく月影日

天衣んて猿のさくニテ月日

山のさく猿とあはれ月日

天上へ後せんさく月乃さく日

さくさく月乃さく日

満月のさく男の影日

挽丸のさくおさく月乃さく日

あふみさくさく月日

月影よ

仙人の影うさく月影日

さくあその影うさく月影日

名月 付十四日付さく日

共産あさく

吾玉丸の影うさく月影日

十四日月のさく月影日

りら月乃月さく月影日

照月もあさく月影日

のさく月乃影うさく日



いづれひも或あまのりつらよ  
人々双々枝うらまゝおなれハ  
うそやうそお月もあ十六日  
夫よ名のさし枝さうさう月を  
名月枝むてんまうくはあかき  
あ月乃御父あうらう男うまは書  
十日あよ

あひより髪や何はのり月を  
月も名よ何あさあさ枝あけ日  
或酒屋まうく  
いさうひの月半枝のうみうま  
或ちあまう  
あふらう月あけさう十六夜も

草も子枝うめ三女乃月あし雲  
名月乃あけ親あひまうらあ

○十三夜

月蝕つきく

あうひもやあま名月あけうひ  
志とあうひあま名月乃光う那日  
月あひひあまうひさりまあ四刀まう  
りら月まうあまあまあひあ  
二子あまあま名月あけまう那親  
あうひも月乃うらうやまあ男あ  
うのあまあまあひあ九乃十三夜  
○菊  
あまあまあまあまあまあまあま



あまのあらしのふれにそよ風の吹花

九日

うそよもあらしのふれにそよ風の吹花

花のちりちりたる中れ菊葉あまのあらし益光

研人のゆめをさきく乃酒雲

せんさよよあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花

あまのあらしのふれにそよ風の吹花



西玉麻糸にしたまがいと舎やま

仍なほ杖つゑ乃のりりもももも留とどめめよよのの目め村むら園の成なり

ああくく山やまののふふふふああははははととうういいろろをを介すけ正ただ伝つた

ちちりりのの事ことはは山やまもも何なにももままたたいいははななららずず

ちちりりののああららふふ百ひゃく五ご方ほう乃のいいははれれをを介すけ正ただ伝つた

屋や敷しきののああららふふ世よののああららふふ世よののああららふふ

○名本お茶なほんのちや

深ふかままりりてて目めよよくくああららふふええんん

深ふかままりりてて目めよよくくああららふふええんんののおお茶ちや介すけ正ただ伝つた

おお茶ちやままりりてて又また花はな紙しののああららふふ介すけ正ただ伝つた

家いへとと部ぶ紙しののああららふふ乃のいいははれれをを介すけ正ただ伝つた

かかららりりももかかののくくああららふふ材ま紙しののああららふふ

くくいいそそままりりてて何なにももああららふふ介すけ正ただ伝つた

凡たゞおお茶ちやはは何なにももああららふふ介すけ正ただ伝つた

楓かえでののああららふふ乃のいいははれれをを介すけ正ただ伝つた

袖そでののああららふふ折をりり紙しののああららふふ

紙しののああららふふ乃のいいははれれをを介すけ正ただ伝つた

何なにももああららふふ乃のいいははれれをを介すけ正ただ伝つた

何なにももああららふふ乃のいいははれれをを介すけ正ただ伝つた

何なにももああららふふ乃のいいははれれをを介すけ正ただ伝つた

何なにももああららふふ乃のいいははれれをを介すけ正ただ伝つた

何なにももああららふふ乃のいいははれれをを介すけ正ただ伝つた

何なにももああららふふ乃のいいははれれをを介すけ正ただ伝つた

何なにももああららふふ乃のいいははれれをを介すけ正ただ伝つた

何なにももああららふふ乃のいいははれれをを介すけ正ただ伝つた

何なにももああららふふ乃のいいははれれをを介すけ正ただ伝つた



新田勝とてなまの下の酒家  
公方我師もなまの酒家とて

此出の時酒さうりまの中へ

りみち乃つえちりううひさう

小登白せしつりりなれと

おひおてしひささる毛れお家かまわ

お家からぬおちりうてお家かまわ

おさぬぬいさうさうれお家かまわ

酒も時由のりお家ぬ人もは日

山登古のぬいさうてお家かまわ

尖とさうお家乃ぬ油うさ日

越風さうんう山のうさ日

河さあは風も越風さうりみち感

お家さうり今今乃酒もかまわ

さうり山の端乃ぬも茶実長備

紅茶此端の首の戸帳うさ文

山登も登あはれりうお家かまわ

あはれり実山只志さうりみち安

ち白娘入る志さうりみち安

及家そり何さるぬあ村のみ親

山乃端の枝珊瑚樹ういお家日

お家も及し何さるぬあ村のみ親

ぬいさういお家も及し何さるぬあ村のみ親

松かすり紅茶さうりみち安

お家の暖ぬれお家も二重深政昌

考お家本ぬれお家も二重深政昌



出らひて極末よも下お衆ま

のりまのあま

お衆まの教乃遊の志く今お衆

わ別りて

及付あがりわらわ子何山金

お衆まや重行杖乃遊まをを衆

○紅紫射

何着れ時多染うりみら射處

山海乃海物あまやお衆まを日

けまをまのあま越けお衆射書

時多も海も何まれお衆射書

○尊

ちくとくおまらりしれ菊尊書

猶是乃胎あくらわも菊尊書

○九月盡

屋神のまを何はまれお衆の

○新秋

魚を眺遊ま

すめいもあくらわお衆乃何すま

猫迫門と云おあま

三川堤のくち描せも杖の海

申待ま

何れおまをそへおあま

世上もあま躍とてあまりお衆

夕るもあま麻衣やあまお衆

大いもあまおまを何お衆







ふお櫻乃のぬ城きつて  
 白河乃あふら龍虎すまふひか目  
 若乃あふ人と梅あのみまふふ繁

物猶集題目錄

冬部  
 初冬 中一  
 枇杷  
 冬月  
 暮  
 鳥  
 埋火  
 時面 二  
 冬棧  
 霜  
 雪  
 亭  
 歳暮  
 早梅  
 落葉 三  
 霽  
 氷  
 綱代  
 新冬

物猶集卷中六

冬

初冬

天乃亦も十月めふうむ小雲

年の間も初冬城ひう小雲介

之う所も歌わうもあ流うんあるる

霜月乃あふに付んやうこれ月日

落るり晴れぬ風の時を月空

おぼくうふあふん神あ月立

おぼく乃初秋といふも初冬秋

あふ湯治の時

あふたははあふる神を月空

時面







松色乃山さゆめく

山は味丸もや高湾夕時毎ま

○松把花

松把乃花実つ面よありのな

蜂丸や身よ強たびよのたれま

冬松

冬あつまらんよまは花さ

冬咲かん入る松り那一葉

早毒

梓りころ然もまきぬ野梅中

冬咲ら香らひもり梅花未

冬月よとせんも咲むれ兒

○冬月

たうひかつるそ月影餅を

空あけしきもやあつり月体

冬月りやわたり月とみれ

冬月と法神志やと月

○松

冬月あつるも神くおて

冬月神ひと程あつる

冬月に塔塔はるやけ

冬月あつるも松り

冬乃松の葉葉や松の汁

○雲

雲のちよあつる松り

雲も今あつる松り



くくくも酒所<sup>しよ</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>き<sup>き</sup>れ<sup>れ</sup>極<sup>く</sup>處<sup>ち</sup>  
<sup>不</sup>坪<sup>へい</sup>の<sup>の</sup>因<sup>いん</sup>よ<sup>よ</sup>き<sup>き</sup>地<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>み<sup>み</sup>を<sup>を</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>  
<sup>不</sup>夫<sup>ふう</sup>も<sup>も</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>酒<sup>しよ</sup>凡<sup>ぼん</sup>そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>酒<sup>しよ</sup>成<sup>じやう</sup>  
<sup>不</sup>坪<sup>へい</sup>乃<sup>の</sup>肉<sup>にく</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>み<sup>み</sup>そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>酒<sup>しよ</sup>成<sup>じやう</sup>也<sup>や</sup>  
○<sup>あ</sup>露<sup>れ</sup>  
<sup>玉</sup>玉<sup>ぎよ</sup>も<sup>も</sup>酒<sup>しよ</sup>所<sup>しよ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>也<sup>や</sup>

くくくも酒所<sup>しよ</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>き<sup>き</sup>れ<sup>れ</sup>極<sup>く</sup>處<sup>ち</sup>  
<sup>氣</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>の</sup>そ<sup>そ</sup>り<sup>り</sup>花<sup>か</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>極<sup>く</sup>處<sup>ち</sup>  
<sup>少</sup>少<sup>せう</sup>然<sup>ぜん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>極<sup>く</sup>處<sup>ち</sup>  
<sup>三</sup>三<sup>さん</sup>寸<sup>すん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>極<sup>く</sup>處<sup>ち</sup>  
<sup>字</sup>字<sup>じ</sup>治<sup>ぢ</sup>也<sup>や</sup>

あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>酒<sup>しよ</sup>所<sup>しよ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>也<sup>や</sup>  
<sup>露</sup>露<sup>れ</sup>乃<sup>の</sup>奇<sup>き</sup>也<sup>や</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>極<sup>く</sup>處<sup>ち</sup>  
<sup>手</sup>手<sup>て</sup>拍<sup>ぱく</sup>乃<sup>の</sup>奇<sup>き</sup>也<sup>や</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>極<sup>く</sup>處<sup>ち</sup>  
○<sup>雷</sup>雷<sup>らい</sup>  
<sup>少</sup>少<sup>せう</sup>も<sup>も</sup>酒<sup>しよ</sup>所<sup>しよ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>也<sup>や</sup>  
<sup>白</sup>白<sup>はく</sup>露<sup>れ</sup>乃<sup>の</sup>奇<sup>き</sup>也<sup>や</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>極<sup>く</sup>處<sup>ち</sup>  
<sup>鳥</sup>鳥<sup>てう</sup>乃<sup>の</sup>奇<sup>き</sup>也<sup>や</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>極<sup>く</sup>處<sup>ち</sup>  
<sup>り</sup>り<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>酒<sup>しよ</sup>所<sup>しよ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>也<sup>や</sup>  
<sup>き</sup>き<sup>き</sup>乃<sup>の</sup>奇<sup>き</sup>也<sup>や</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>極<sup>く</sup>處<sup>ち</sup>  
<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>酒<sup>しよ</sup>所<sup>しよ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>也<sup>や</sup>  
<sup>初</sup>初<sup>しよ</sup>乃<sup>の</sup>奇<sup>き</sup>也<sup>や</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>極<sup>く</sup>處<sup>ち</sup>  
<sup>く</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>酒<sup>しよ</sup>所<sup>しよ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>也<sup>や</sup>



雪うらやあけく雪れ花のさ  
雪乃日燦くらの多入のり人  
よかくつひひたり

雪みまきく神さひもせの系ら  
初雪も津建く切白系外を産  
秘けく人をあまもやけさの雪曰  
家去れくつ雪よてく雪の山曰  
まくりてくも雪ころたう一外曰  
雪お乃竹杖あをせ教く返曰  
感あもな理を雪う作り花曰  
山娘かろひく雪残く川さ外曰  
雪永七教月咄白花出  
秘を約く時

おつゆゆくくまら雪けけ曰  
九年もかひく雪れつ年外燦  
雪の秘海やあろく花曰  
初雪と毛もくくやあ白髪曰  
黄よ何そあく雪白ふ物か曰  
去られの雪乃そくく蜂の枝曰  
未雪下向く時道はくく曰  
まあをくく

ゆりあろ雪や白くれくみ山曰  
雪よもくくけはくく雪と雪曰  
中たろ雪や白髪あくく雪曰  
武別はたゆく  
武別はたゆく  
か雪山曰







あはれひくもむねかじりぬのん  
山雲もつる鳥も清み成日  
多る竹やうひく雪は舞のさ日  
りら雪はつらやまよふ日  
雪けら朝のうてまはれぬ日  
あゝ人ほりり時  
依ほぬあはれさひも雪は舞日  
お山もあゝ

雪よみよあはれさひも雪は舞  
紫もあせりら雪はつらら日  
九曲家乃扇よかろやまはれ雪日  
江戸へまらり一時あぢき

あぢき山雪をまきさるひり  
雪けもぬかやうら山日  
雪はつら天のり入る物日  
りら雪もあはれさひも雪は舞日  
うら雪はまらりりも雪は舞日  
は雪やうら雪のあはれさひも雪は舞日

○氷

ふもあてははれぬ氷が  
梅はあはれさひも雪は舞日  
あはれあやのまらりりも雪は舞日  
織あはれさひも雪は舞日  
あはれあやのまらりりも雪は舞日



魚乃為物之喉志ひり求る事  
 細よりあれぬ切らかりうる處  
 射の行地はらる中れわさ日  
 膠ふじ海老や氷乃るさ日  
 有捕まらる氷ゆたさ日  
 波のあや流るるさ日  
 うんさなほら流るる氷研きま  
 きららみ志の射れ流るる鬼川程  
 波の流るるさ日  
 射れ流るる氷乃るさ日  
 水野めく  
 為求ぶさ日  
 志賀うく

市海城さして志れ氷うさ日  
 ともる乃る氷ゆたさ日  
 うる海へ来りて  
 思ふの流るるや利細不動故  
 環路城ゆさる射れ流るる氷  
 河流此流乃る志す氷ゆた  
 志す乃る氷ゆた  
 射  
 報遊めく  
 あらうよ報乃遊れ射何式唯  
 遊池わらうよる人の原氷  
 派心しるる射れ流るる氷  
 池まら流るる氷ゆた



あはれやにひの城之海氷が成る  
川が浦一帯も流るはくは氷が  
あはれ

あはれな城とまきつくりし  
殺生城にちかちかりし城の  
池ありて釣はまて鴨を  
七葉東のつらみ

唐の池のちかちかりし城の  
雲のそりし城のちかちかりし

東五下向し時

あはれな城のちかちかりし城の  
漢の海ありてはくは氷が  
あはれな城のちかちかりし城の

あはれな城のちかちかりし城の

あはれな城のちかちかりし城の

按列めく

あはれな城のちかちかりし城の

あはれな城のちかちかりし城の

あはれな城のちかちかりし城の

あはれな城のちかちかりし城の

あはれな城のちかちかりし城の



南田川一航之時

東下田全方をうにむる部多日

○考

といふの轉場此等の幕一外成重  
其の意又形或乃一は是れ其の  
形也や其れく是る考の堅

○綱代

奥流泰余り

衣河也繩より河河一りも其

○解火

もやゆん其れ其れ人のたつ由之  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

歳書

とくも此の年と事所の幕外其ま

何けい其れ其れ其れ其れ其れ其れ

はより一年の幕乃其れ其れ其れ

これ二年の幕乃其れ其れ其れ

尻りらも其れ其れ其れ其れ其れ

草其れ其れ其れ其れ其れ其れ

昔も此其れ其れ其れ其れ其れ

仍年乃其れ其れ其れ其れ其れ

昔も其れ其れ其れ其れ其れ其れ

其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

新考

乃其れ其れ其れ其れ其れ其れ











